

# 個人の性格特性が教育学部生の教職志向性に与える影響

—Big 5 を用いて—

○西本瑞穂<sup>#1</sup>・平木里奈<sup>#1</sup>・西村優希<sup>#1</sup>・石野陽子<sup>#2</sup>  
 (#<sup>1</sup>島根大学教育学部学校教育課程 I 類・#<sup>2</sup>島根大学教育学部)

## 目 的

現代の学校教育において、子ども自体やそれを取り巻く環境の多様性をはじめとして、学校で起こる問題や教員の働き方に関する話題をしばしば耳にする。それらが教員養成課程に在籍しつつも最終的に教員を目指さない学生に影響している節がある。教員養成課程に在籍初期の大学生の教職志向性に対し、どのような要因が影響しているのか。

そこで、本研究では、主要 5 因子性格検査の尺度（以降 Big 5 とする）を用いて、教育学部生を対象として教職志向性について調査した。これら Big 5 の性格特性が教職志向性にどれほど影響しているのかについて検討する。

## 方 法

**調査対象者** 国立大学の教員養成課程に在学する大学 1 年生 115 名（男子 47 名、女子 68 名）

**調査方法** 質問紙法。心理学系必修科目授業時において、配布回収を行なった。配布部数 115 部、回収部数 115 部（100.00%）、有効調査部数 104 部（90.43%、男性 40 名、女性 64 名）であった。

**調査時期** 2022 年 7 月 8 日（金）2 限終盤に 20 分程度で実施した。

**調査内容** ①教職志向性尺度（島根大学教育学部が独自に設定）：4 項目、非常にあてはまる—あてはまらないの 6 件法、②主要 5 因子性格検査の尺度）：24 項目、はい—いいえの 3 件法（村上ら、1997）

## 結 果 と 考 察

教員養成課程に在学する大学生の教職志向性を、Big 5 の外向性、調和性、誠実性、神経症性、開放性の 5 つの性格特性からなる質問事項を用いて質問紙調査を行った。教職志向性を低群から高群の 3 段階に分け、分析を行なった（TABLE 1）。

まず、相関分析を行なった。教職志向性と外向性及び調和性には相

関が認められなかった ( $p>.05$ )。対して、誠実性、神経症性、開放性には教職志向性との正の相関が示された ( $p<.01$ )。

次に、 $t$  検定を行なった。誠実性は教職志向性の低群が中群高群に比べて低かった ( $p<.01$ )。開放性においては、教職志向性の高群が低群中群に比べて高かった ( $p<.01$ )。また、神経症性は教職志向性の低群中群に比べて高群が低かった ( $p<.01$ )。

Big 5 における誠実性は物事に対する姿勢を示している。結果では、教職志向性が低群よりも中群高群の人の方が誠実性は高くなっている。誠実性が高い場合は誠実的で責任感があり物事に熱心に取り組む性格で、低い場合は諦めが早く責任感のない性格であるとされる。教員という仕事は子どもたちの学びを人間的な部分や学問的な部分も含め、責任を持ってその成長を促していくものである。誠実性が高い人ほど教職志向性が高いということの要因には、誠実性が高いがゆえに「教師とはこうあるべきだ」などの考えを持ち、教職に真面目に向き合い、より良い教育を行なっていこうとする志が高いことにあると考える。その他の要因については今後更に考察を深めていきたい。

Big 5 の主要性格特性に基づいて教員養成課程の大学生に教職志向性について調べたが、他の因子でもさまざまな結果を見ることができた。個人の性格特性が教職志向性に対してどのように影響しているのか更に検討をしていく必要がある。

TABLE 1 教職志向性質問項目平均を基準として Big 5 の因子得点を低群・中群・高群に分けた群間での相関と  $t$  検定の結果

相関係数	教員志向性 ( $M=4.63, SD=.71$ )						
	平均値			$t$ 検定			
	低群	中群	高群	低—高	中—高	低—中	
外向性	.12	1.99	1.73	1.81	.45	.67	.11
調和性	.14	2.39	2.58	2.61	.14	.75	.07
誠実性	.31 **	1.72	2.08	2.32	.00 **	.11	.01 *
神経症性	.28 **	2.50	2.45	1.97	.02 *	.00 **	.75
開放性	.28 **	1.82	1.93	2.17	.00 **	.04 *	.27

\*\* :  $p<.01$  \* :  $p<.05$